

令和六年度 山口県立大学 国際文化学部 文化創造学科
学校推薦型選抜（地域貢献人材発掘枠） 「小論文」 問題用紙

問 次の文章を読み、その要旨を示したうえで、デジタル技術を用いて地域文化を保存、活用することについて、具体例を挙げて、あなたの考えを八〇〇字以内で述べなさい。

祭を「文化財」の観点で捉えれば、そこで使われる道具は有形文化財、行なわれる儀式の所作や準備作業は無形文化財と分けることもできる。これらは一体として調査・収集され、従来の M A L U I（注 1）のなかに保存されてきた。その一方で、デジタル技術の発展は、実施者や鑑賞者の意図にかかわらず、後から参照可能な状態で情報を記録することを可能にした。

その呼び名の通り、無形文化財は形のないものであり、人から人へ継承されるかたちをとってきた。口伝、見て覚える、文章化して残すなど、記録は簡単なものではなかった。その後、技術の発展により写真撮影、ビデオ撮影や録音といった記録を助ける手段が増え、今やスマートフォンによって簡単に映像や音声、写真を残すことが可能になっている。たんに記録が簡単になっただけでなく、その場にいる誰もが、自身の眼前の状況をカジュアルに記録・保存できるようになってきたことで、記録の種類も爆発的に増加している。江戸時代に神田祭の様子の一瞬を切り取り『神田明神祭礼繪巻』としてわざわざ残した人々は、沿道の観覧者がそれぞれに祭の様子を撮影し、祭に参加している人々も神輿やフロート（注 2）の上から記録を撮っている状況は想像できないだろう。さらに、今日スマートフォンで記録された映像や音声は、簡単にインターネットに投稿することができる。検索サイトで「神田祭」と入力すれば、一五〇〇万を超える検索結果と、神田明神、新聞社等のニュースメディア、祭の参加者、沿道の観覧者らが撮影しアップした多数の写真・動画が表示される。

これらの記録は、イベントを調査して体系的に保存する目的に沿って作成されてはいない。個人や組織で異なる関心・目的にもとづいて記録され、投稿され、保存されており、検索結果の表示順ですら常に変化する検索エンジンの仕組みに依存している。体系的な記録としては活用しにくいものであり、そのままではデジタルアーカイブ（注 3）されているとは言えない。ただし、近年では、スマートフォンに高機能のカメラや GPS などのセンサーが搭載されており、それらの情報もまた、場合によっては個人が意図しない状況で投稿した記録に組み込まれていく。さらに 3D による記録など専門的な知識や特殊な装置が必要だった記録手法も、個人レベルで作成可能になってきている。体系的な調査からこぼれ落ちざるをえないさまざまな情報は、技術の発展と普及による、調査や体系的保存を目的としない記録の集合によって、擬似的なアーカイブとして残りやすい状況になってきた。

一方で、こうした技術は実施者による記録を残すことも容易にしている。自らがつける日々の記録、参加者間のメール・SNS 等を通じたやり取りなど、コミュニティで日常的に生成される情報が、断片的ながらもデジタル化された状態で蓄積されていく。人口減少や環境の変化で、さまざまな無形文化財が継承の限界を迎え、地域コミュニティですら終焉を迎える時代において、「むらおさめ」として現実の場の消滅を前提としたアーカイブも進んでいる。将来的にはこうした意図せざるデジタル記

録も重要な情報源となっていく可能性が高い。

ここで、実際に祭の準備段階から実施段階までを、複数の方法でデジタルデータとして残し、公開と共有を目指した試みに触れておく。東京都千代田区の神田明神では、きわめて大規模な祭「神田祭」が二年に一回行なわれる。江戸時代には將軍家関係者の観覧を受けたことで「天下祭」とも呼ばれ、現在は町会ごとに神輿を宮入りさせる勇壮な祭として知られている。神田祭では、江戸時代に行なわれていた祭の姿を、現代の技術と組み合わせさせて再現する試みが行なわれてきた。

二〇一五年の神田祭では3Dプリンタを利用して江戸時代の仮装を再現している。この再現プロジェクトにおいては、参加した大学教員、学生、神田明神関係者間の議論を、主にメールアドレスで行なってきたが、それらのメールをすべて抽出して保存している。さらに実際に祭で利用した3Dプリンタを用いた一連の作業を、3Dデータおよび付属品のデータと合わせて祭のレシピとして提供し、インスタラクタブルズ (Instructables) (注4) で公開した。二〇一七年の神田祭ではデジタル活用を一層進め、東京文化資源会議の「地図ファブ」の取り組みとして「神田祭ラボ」を立ち上げた。ここでは、デジタル地図を利用して当日の祭の移動経路と江戸時代・明治時代の祭の状況を確認できるようにし、その上に神田祭の歴史や地域の飲食店の情報などをプロットした。さらに祭の当日には山車にGPSを搭載し、リアルタイムに状況を確認できる試みを行なった。

祭を実施する参加者側が記録を残すことが容易になり、それを共有することも可能になった。この事實は、豊かな文化資源をデジタルデータとして残し、活用する可能性を大きく押し広げている。ただし、検索可能な記録が残されるということとデジタルアーカイブとして整備されることの間には、まだ大きな溝がある。参加者は、あくまでもその時その時に有用と考えられた記録方法をとっているため、メタデータ (注5) などの統一性はなく、記録の粒度 (注6) も異なっている。鑑賞者が個別に保存した記録が、インターネット上で擬似的なアーカイブとなっている状況に比べれば、特定の目的をもって整理されているので、アーカイブ性は増しているかもしれない。しかし、これらの記録をデジタルアーカイブとして長期的な保存・活用を進めていくためには、データ整形やプライバシー問題、実施者間の感覚の違いなど課題は多い。従来のデジタルアーカイブ側がどのようにその守備範囲を広げていくか、方法と技術両面からの議論が必要であろう。

(出典 鈴木親彦・谷川智洋・加藤謙信「文化活動の側面を持つアーカイブ——祭の記録から動画投稿まで」柳与志夫監修、加藤諭・宮本隆史編『デジタル時代のアーカイブ系譜学』みすず書房、二〇二二年、一四八〜一五一頁による。以上の文章に記述の形式について最小限の手を加えた。)

(注1) 博物館、文書館、図書館、大学、企業を合わせた文化産業全体のこと。

(注2) 祭りやパレードで使用される飾りつけされた乗り物。

(注3) 文化資源をデジタルデータとして保存し、提供すること。

(注4) ものづくりの材料や方法を共有できるコミュニティサイト。

(注5) 作成者や作成時間など、データに付与されているデータ。

(注6) データの細かさ。

令和 6 年度 国際文化学部 文化創造学科 学校推薦型選抜（地域貢献人材発掘枠） 小論文 出題意図

【課題文の出典】

鈴木親彦・谷川智洋・加藤謙信「文化活動の側面を持つアーカイブ——祭の記録から動画投稿まで」柳与志夫監修、加藤諭・宮本隆史編『デジタル時代のアーカイブ系譜学』みすず書房、2022年、148-151頁。

【出題意図】

この設問は、地域の文化的な活動をデジタル技術によって記録することをテーマとして、地域文化の保存と活用に関する見識を問う。とりわけ、記録方法の変化や、地域文化を保存する意義や課題を読み取り、その意味を具体的に理解できる思考力が身についているかを評価する。また、受験者が、自らの経験や知識に基づいて、自身の考えを日本語で適切に表現できているかを問うものである。